

合には一〇六倍余（二〇八二円から一二万四七三八円へ）と、全国の三倍以上の伸びを示している。その結果、全府県のなかで占める本県の地位は一八八七年の第一〇位から一八九七年の第五位、一九〇七年の第三位、一九一七年の第四位とほぼ着実に上昇し、全国会社資本額のなかに占める比率も、一八八七年の一・四割から一八九七年の四・〇割、一九〇七年の五・六割、一九一七年の四・九割と大幅に増伸することになった。もっともこの場合、基準年となった一八八七年の本県の資本額には多摩郡がふくまれており、その意味では同一県域内の正確な成長率を示すものということはできない。しかし、右に示した一八八七年の本県の資本額から多摩郡のそれを除けば、その資本額はより小さく、一九一七年にいたる成長率はより高くなるはずであるし、また人口千人当たりの資本額も、多くの製糸・織物工場を擁した多摩郡を除けば、一八八七年当時の千人当たり資本額が、右の数値より大きくなることはなかったと考えてさしつかえないであろう。一八八七年の本県の資本額のなかで、工業会社資本金の比率が異常に高いのも、多摩郡がふくまれていたためと思われる。

**商・工業の資本金額** 他方、本県の会社資本のなかに占める商・工の比率は、一八九七（明治三十）年にはまだ商業会社が全体の九割近くを占め、工業会社のそれは一割に過ぎない。また、その後一〇年間の工業会社資本金の伸び率（四・一倍）は、

商業会社のそれ（一・四倍）の三倍近くにのぼったが、一九〇七年の工業会社資本金は、まだ全体の一七・五割に過ぎなかった。また、全国工業会社資本金のうちに占める比率も低く（二・八割）、上位一〇府県の第七位に過ぎない。したがって、この時期の本県が、商業県から商工業県へ体質的变化をとげたと考えるのは困難であり、むしろ、次の一〇年間（一九〇七—一九一七）に求める方が妥当といえよう。事実一九〇七（明治四十）年から一九一七年にいたる工業会社資本金の伸び率は三・九倍にのぼり、同期の商業会社資本金の伸び率（〇・九倍）の四倍以上に相当した。また、県内会社資本総額に対する比率も三四・五割と三分の一以上に達している。橘樹郡臨海部の埋立てや浅野セメント・日本鋼管・明治製糖・味の素などの大規模工場の進出が

始まったものこの時期であり、横浜周辺の雑工業や内陸部の製糸業などとは違った新しい体質を、本県経済に付け加えたものということが出来る。こうした意味において、一九〇七年以後の一〇年間は、本県経済の体質変化の重要な転換点といつてさしつかえないのである。

## 二 県内の地域的特色

**行政区の変遷** 以上のような明治後期の経済発展は、地域によってかなりの偏差をともなった。以下『神奈川県統計書』によつて、この時期の郡別の特徴を考察してみたいと思う。

ところで、こうした郡別の特徴を明らかにするうえで念頭に置かなければならないのは、この時期の行政区の変遷である。まづ一八八九（明治二十二年）四月一日に市制・町村制が施行され、従来の横浜区（一八七八年七月、郡区町村編成法によつて久良岐郡から分離が横浜市に昇格した。市制施行に先立つ一八八七年十二月末の横浜区の人口は一万四九八一人にのぼり、すでに県内郡区中の筆頭となつていた。また一八九六年四月一日には大住・洵綾両郡が合併して中郡となり、さらに一九〇七年二月十五日には三浦郡横須賀町も市制を施行し、同郡から分立した。同年十二月現在の同市の人口は、六万二八七六人にのぼつた。なお、これに先立つて一八九三（明治二十六年）四月一日には南・北・西多摩郡が東京府に編入され、旧相模国全域と旧武蔵国橋樹郡・都筑郡・久良岐郡から成る現県域が確定することになったのである。

**人口増加の地域別動向** 次に人口増加の地域別動向についてみることにしよう。すでにふれたように一八八七年から一九一七年にいたる現県域の人口増加率は八六割にのぼり、全国のそれ（四四割）の二倍近くに相当した。表三・八はこれを每一

表3-8 全国・神奈川県人口増加率

区分	1878— 1887年	1887— 1897年	1897— 1907年	1907— 1917年
全 国	9.22%	10.64%	12.93%	15.39%
神奈川県	26.91	23.58	28.40	17.47

注 1 本稿表3-1および3-2により作成。

注 2 全国は朝鮮・台湾を、神奈川県は三多摩を含まない。

○年でもたものであるが、これによれば、もっぱら自然増加に起因する全国の増加率は一貫した上昇傾向をたどっているが、本県の場合は、終始全国平均を上回る高い増加率を示す反面、波動的な人口流入を反映するかなりの凹凸が認められる。また、これを地域別にみると(表三一・三一〇)、もっとも増加率の高いのは横浜をふくむ旧武蔵国三郡、つぎが相模川以東の旧相模国三郡で、相模川以西がもっとも低くなっている。このことは当時の人口流入が、東京湾臨海部の発展に起因したことを、雄弁に物語るものといえよう。相模川以西の増加率は全期を通じて全国平均に近いが、一九〇七年以降はこれを下回っている。

### 農業生産の動向

つきに農業生産の動向についてみることにしよう。先にふれたように一九一七(大正六)年の穀作物の生産量は、雑穀を除いて、一八八七年のそれより増加したが、その増加率は芋類のほかすべて全国平均を下回り、千人当たり生産量は芋類以外すべて一八八七年より減少した。ところでこれを郡別にみた場合、どのような特徴をみいだすことができるであろうか。まず米については(表三一・一一)、従来、絶対量・千人当たり生産量とも群を抜いていた橋樹郡の低落が目立ち、絶対量では中郡が、千人当たり生産量では足柄上郡が首位を占めた。また鎌倉・三浦両郡の低落と都筑郡の上昇も目立っている。

表作では(表三一・一二)旧武蔵国三郡を除いていずれも一八八七年の生産量を上回っているが、千人当たり生産量は、橋樹・都筑両郡のほか、鎌倉・愛甲・足柄下郡も下回った。絶対量・千人当たり生産量とも首位を占めたのは高座郡であった。要するに米麦の生産については、大まかにいって都筑・足柄上(以上米)、高座・中・津久井(以上麦)など内陸部の上昇と、橋樹・三浦・鎌倉・足柄下など臨海部の低落を指摘することができるのである。

表3-9 県内地域別人口数

地 域	1878年	1887年	1897年	1907年	1917年
橘樹・都筑・久良岐	178,475	274,572	381,667	534,978	646,287
三浦・鎌倉・高座	180,538	215,426	243,907	308,186	362,946
津久井・愛甲・中・ 足柄上・下	209,592	231,663	266,256	302,006	335,376
計	568,605	721,661	891,830	1,145,170	1,344,609

注1 『神奈川県統計書』、『日本帝国統計年鑑』、『農商務統計表』により作成。  
 2 第1グループには横浜区ないし横浜市、第2グループには横須賀市が含まれている。

表3-10 県内地域別人口増加率

地 域	1878— 1887年	1887— 1897年	1897— 1907年	1907— 1917年
橘樹・都筑・久良岐	53.84%	39.00%	40.16%	20.80%
三浦・鎌倉・高座	19.32%	13.22%	26.35%	17.76%
津久井・愛甲・中・ 足柄上・下	10.53%	14.93%	13.42%	11.04%
全 県	26.91%	23.58%	28.40%	17.41%

注 表3-9より作成

### 三 明治後期の県内企業

銀行・商業 会社にふれたように神奈川県下の会社資本の増加率は、一八九七(明治三十)年頃まで商業会社が圧倒的であり、以後工業会社資本の増加率が商業会社を上回るようになったが、一九〇七年の商・工業社資本金の比率は、まだ七四対一七にとどまっていた。したがって、この時期までの本県は、すでに活発な工業化が進みはじめていたとはいえ、基調としてはなお商業的色彩の強いものであった。このような基調をささえたのは、いうまでもなく横浜市であった。事実『明治三十年神奈川県統計書』によれば、当時同市は県内銀行資本の九四割、商業会社資本の八七割余を占めていた。同統計書には県内の主な企業名が収録されているが、それによれば当時同市には横浜正金銀行・第二銀行・第七十四国立銀行・茂木銀行・左右田銀行・横浜若尾銀行などのほか、生糸売込



表3-11 郡市別米生産量

地 域	生産 総 量		千人 当 たり 生 産 量	
	1887年	1917年	1887年	1917年
三 浦	石 32,445	石 19,886	石 363.5	石 198.1
鎌 倉	35,284	31,927	795.1	510.7
高 津	48,454	61,427	592.4	534.3
久 井	2,194	4,674	90.1	140.6
愛 甲	22,837	23,832	731.3	551.3
中(大住・淘綾)	59,162	72,355	709.5	594.3
足 柄 上	26,339	42,662	701.7	839.8
足 柄 下	27,311	38,013	495.2	440.3
久 良 岐	18,017	9,420	420.0	470.0
都 筑	21,393	37,791	658.0	821.3
橋 樹	87,349	70,352	1,037.6	586.7
横 浜	—	4,881	—	10.6
横 須 賀	—	661	—	7.8
全 県	380,785	417,881	527.7	310.8

注 『神奈川県統計書』により作成

表3-12 郡市別麦生産量

地 域	生産 総 量		千人 当 たり 生 産 量	
	1887年	1917年	1887年	1917年
三 浦	石 41,594	石 55,058	石 466.0	石 548.5
鎌 倉	36,049	46,346	812.3	741.4
高 津	59,703	133,256	729.9	1,159.1
久 井	19,408	38,539	796.7	1,158.9
愛 甲	32,090	32,891	1,027.5	760.8
中(大住・淘綾)	64,420	114,096	772.6	937.1
足 柄 上	23,354	36,507	622.2	718.6
足 柄 下	19,408	29,833	351.9	345.6
久 良 岐	17,650	12,361	411.5	616.7
都 筑	47,536	42,806	1,462.2	930.3
橋 樹	72,571	64,838	862.0	540.7
横 浜	—	6,086	—	13.2
横 須 賀	—	692	—	8.1
全 県	433,783	613,309	601.0	456.1

注 『神奈川県統計書』により作成

・製茶売込・陶器売買・倉庫業などの各種の商社が店舗をつらねていた。また郡部にも秦野銀行・伊勢原銀行・松田銀行・小田原銀行・江陽銀行・平塚銀行・鎌倉銀行・藤沢銀行などの中小銀行や、繭・生糸・織物・たばこなどの売買に従事する中小商社が、各地にあらわれていたのであった。

### の工業 進 展

明治後期の県内の工業化は、内陸部の在来工業（製糸・織物・たばこ製造業）・横浜周辺の雑工業と東京湾臨海部への大企業の進出という、ふたつの対照的なかたちで進行した。

一八九〇年代に臨海部にあらわれた大工場は、いずれも東京・横浜の企業家グループによって設立された横浜船渠株式会社と浦賀船渠株式会社であった。このうち前者は原・茂木・大谷・若尾などの有力な横浜商人と渋沢・浅野・大倉・益田・小室など中央の大資本家の出資によって一八九三（明治二十〇）年十二月設立され、翌年十月から海面の埋立てとドックの築造に着手した。そして、一八九六年九月には日本郵船株式会社横浜鉄工所を買収し、鉄工と修船の作業を開始した。当初は日本郵船所属船舶の修理が主であったが、一九一六年十二月からは造船部門にも進出し、一九三〇年代には二万トン近い大型客船（秩父丸・氷川丸など）も建造したが、一九三五年十一月、三菱重工工業株式会社に吸収された。現在の三菱重工横浜造船所はその後身である（『資料編』17近代・現代⑦、『三菱日本重工工業株式会社史』）。

他方、浦賀船渠株式会社は、横浜の渡辺・安部、東京の浅野・安田・塚原などの企業家によって一八九六年十月設立された。設立と同時に月島機械製作所を買収して、鉄工および各種機械製造の基礎とし、ついで一九〇二年六月には石川島造船所浦賀分工場を買収して基盤を強化した。同社は当初から一般商船の修理のほか、小汽船の建造にも従事した。また、軍艦の修理や建造にもはやくから進出し、一九〇二年には米国政府の発注によってフィリピン向け砲艦五隻を建造した。その後第一次大戦中の好況によって名実ともに大造船所の列に加わり、今日にいたっている。現在の住友重機械工業株式会社浦賀造船所は、その後身である（『資料編』17近代・現代⑦、『石川島重工業株式会社一〇八年史』）。

なお、この時期には電気産業も発足し、一八九〇年十月には照明用電気を横浜市内へ供給する横浜共同電燈会社（初代社長 高島嘉右衛門）が、また一八九六年七月には横浜電線製造株式会社も横浜市高島町に設立された。そして一九〇八年には、東京で成長をとげた東京電気株式会社（一八九六年十一月設立）が、川崎町堀川に新工場を建設することになったのである。東京芝浦電気株式会社堀川工場はその後身である。

表三一 一三 県下工場一覽

一八九八年十二月三十一日現在 (『明治三十一年神奈川県統計書』)

工場名称	製品種類	所在地名	創業年月	資本金	職工	動力			
						蒸気力 馬力	電気力 馬力	水力 馬力	水力 馬力
矢沢茶箱製造所	茶箱及紙袋	横浜市扇町一丁目	明治三年四月	10,000円	5	—	—	—	—
茶箱製造所	茶箱及紙袋	三丁目	九年三月	5,000	5	—	—	—	—
黒部精米工場	精米	松影町一丁目	十八年五月	15,000	5	—	—	—	—
横浜活版舎	活版印刷	本町六丁目	三年十一月	3,500	3	—	—	—	—
横浜共同電燈株式会社	電気	常盤町一丁目	二十三年十月	200,000	25	—	—	—	—
後藤工場	七宝	内田町八丁目	六年六月	2,750	3	—	—	—	—
太田鉄工場	鑄物及諸器械	万代町三丁目	十五年五月	10,000	5	—	—	—	—
小西靴製造所	靴類	元町二丁目	八年七月	500	4	—	—	—	—
内田造船所	造船	高島町七丁目	二十二年九月	3,000	4	—	—	—	—
金丸鉄砲工場	銃器	高島町四丁目	二十五年八月	3,000	6	—	—	—	—
荒木製鐵工場	諸器械	海岸通五丁目	二十六年八月	3,000	8	—	—	—	—
出口整理工場	絹布再製	高島町四丁目	二十九年十一月	10,000	6	—	—	—	—
横浜魚油株式会社	魚油	材木町一丁目	二十六年十二月	5,000	2	—	—	—	—
宮田石鹼製造所	石鹼	平沼町二丁目	二十七年六月	?	2	—	—	—	—
沼島家具製造所	家具	内田町六丁目	二十九年六月	1,000	3	—	—	—	—
大ブツ商会	靴具	居留地本町通	二十五年十月	2,000	5	—	—	—	—
横浜船渠株式会社鉄工場	鉄工	桜木町一丁目	二十九年九月	7,000	5	—	—	—	—
安川印刷工場	七宝	清水町三丁目	十五年一月	1,500	5	—	—	—	—
大川印刷所	印刷	太田町四丁目	十五年四月	10,000	6	—	—	—	—
西川風琴製造所	乐器	日ノ出町二丁目	二十年十一月	6,000	6	—	—	—	—

陽川中関川造大玻真社大横横輸出福日横日日本文合横丙鈴南	川島関川造大玻真社大横横輸出福日横日日本文合横丙鈴南	中島煉瓦工場	川村煉化工場	造大日本銘石商會工場	造大日本銘石商會工場	大日本銘石商會工場	眞葛陶磁器製造所	眞葛陶磁器製造所	眞葛陶磁器製造所	眞葛陶磁器製造所	眞葛陶磁器製造所	眞葛陶磁器製造所	眞葛陶磁器製造所	眞葛陶磁器製造所	眞葛陶磁器製造所	眞葛陶磁器製造所	眞葛陶磁器製造所	眞葛陶磁器製造所	眞葛陶磁器製造所	眞葛陶磁器製造所
成製罐所	煉瓦工場	煉瓦工場	煉瓦工場	煉瓦工場	煉瓦工場	煉瓦工場	煉瓦工場	煉瓦工場	煉瓦工場	煉瓦工場	煉瓦工場	煉瓦工場	煉瓦工場	煉瓦工場	煉瓦工場	煉瓦工場	煉瓦工場	煉瓦工場	煉瓦工場	煉瓦工場
摺附木	ブリキ	煉瓦	煉瓦	煉瓦	煉瓦	煉瓦	煉瓦	煉瓦	煉瓦	煉瓦	煉瓦	煉瓦	煉瓦	煉瓦	煉瓦	煉瓦	煉瓦	煉瓦	煉瓦	煉瓦
同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同
神奈川町青木	川崎町久根崎	高津村溝口	橘樹郡田村矢向	本牧村北方	中根岸村	久良岐郡戸太町太田	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同
同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同
十四年一月	二十九年十月	二十八年七月	三十年一月	二十九年二月	二十八年二月	二十九年十一月	三十年三月	三十年五月	三十一年七月	三十年九月	三十一年九月	三十年七月	二十七年四月	三十年二月	二十八年七月	二十八年八月	二十九年十一月	二十三年十一月	二十五年十一月	十五年一月
1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000
二	三	一〇	六	一〇	八	六	六	六	六	六	六	六	六	六	六	六	六	六	六	六
二	三	一〇	六	一〇	八	六	六	六	六	六	六	六	六	六	六	六	六	六	六	六

工場名称	製品種類	所在地名	創業年月	資本金	職工	動力			
						原	電	水	力
茂木製粉所	小麦粉	橋樹郡神奈川町芝生	明治十九年七月	10,000	六	—	—	—	—
小糸煙草製造所	刻煙草	同 町青木	同 二十七年十二月	10,000	三	—	—	—	—
三栄洋行社	摺附木	同 同	同 二十五年十一月	10,000	三	—	—	—	—
河北製糸所	生糸	同 町神奈川	同 三十年七月	10,000	三	—	—	—	—
柳下米搗所	精米	同 町青木	同 二十年五月	5,000	四	—	—	—	—
荒波煙草製造所	刻煙草	同 町芝生	同 四年十一月	8,000	五	—	—	—	—
日本絹紡績株式会社	絹綿及紡績糸	同 都筑郡西谷村上屋川	同 二十五年四月	35,000	四〇〇	—	—	—	—
太陽合資会社工場	生糸	同 都田村川和	同 二十九年五月	10,000	八	—	—	—	—
山本熊蔵工場	精米及小麦粉	同 新田村吉田	同 三十一年十月	100	三	—	—	—	—
安藤五郎左衛門工場	生糸	同 山内村石川	同 二十八年三月	2,000	六	—	—	—	—
黒沼平兵衛工場	同	同 二俣川村二俣川	同 二十七年二月	9,000	三	—	—	—	—
和田喜三郎工場	同	同 同	同 三十一年三月	4,000	六	—	—	—	—
今井平次郎工場	同	同 同	同 二十七年六月	4,000	四	—	—	—	—
清水長右衛門工場	同	同 村今井	同 三十年十一月	3,000	三	—	—	—	—
小糸重太郎工場	同	同 村二俣川	同 二十九年二月	1,000	三	—	—	—	—
安西製紙工場	製紙	同 鎌倉郡中和田村和泉	同 四月	6,000	三	—	—	—	—
和泉館清水製糸場	生糸	同 同	同 六月	5,000	三	—	—	—	—
和泉館	同	同 同	同 同	5,000	一六	—	—	—	—
盛進社宮崎製糸場	同	同 村上飯田	同 二十六年三月	2,800	九	—	—	—	—
盛進社持田製糸場	同	同 中和田村上飯田	同 二十二年三月	10,000	九	—	—	—	—
小沢製糸場	同	同 瀬谷村瀬谷	同 三十一年八月	2,000	八	—	—	—	—

盛進社	高橋製糸場	高橋製糸場	広田製糸場	盛進社栗原製糸場	盛進社島崎製糸場	盛進社三栄組製糸場	三鶯製糸場	同	若尾製糸場	小室製糸場	金井製糸場	新出製米所	北畠鑄造所	戸塚精米精粉合資会社工場	小林製糸工場	大剛	改良合名会社工場	元保田製糸工場	岸松	盛進社小林製糸工場	川口製糸場	石井製糸場	仙田製糸場
同	同	同	同	同	同	同	生糸	精米	同	同	生糸	製粉	鑄造	精米精粉	同	同	同	同	同	同	同	同	同
同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	高座郡藤沢大阪町	戸塚町戸塚	同	同	同	同	同	同	同	同	同
海老名村中新田	村本郷	有馬村杉久保	寒川村一ノ宮	村室田	松林村高田	明治村羽鳥	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同
同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同
二十七年	三十一年	二十五年	二十五年	二十七年	二十六年	二十七年	三十一年	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同
七月	六月	六月	六月	六月	五月	六月	七月	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同
一、五〇〇	二、五〇〇	三、五〇〇	三、五〇〇	一、五〇〇	五、〇〇〇	五、〇〇〇	五、〇〇〇	五、〇〇〇	五、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇	二、五〇〇	一、六〇〇	二、〇〇〇	?	五、〇〇〇	九、〇〇〇	?	七、〇〇〇	一、〇〇〇	五、〇〇〇	四、〇〇〇	三、〇〇〇
四	五	四	七	四	三	五	四	五	二	三	五	六	三	一	三	六	一	五	七	三	六	五	三
一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一
二	三	〇	六	二	二	三	二	八	四	四	五	六	一	五	五	一〇	二〇	八	七	五	五	三	二

工場名称	製品種類	所在地名	創業年月	資本金	職工	動力			
						蒸氣力 馬力称	電氣力 馬力称	水力 馬力称	原動力 馬力称
飯田吉蔵煙草製造場	同	同	同	六、〇〇〇	二				
原市蔵煙草製造場	同	同	同	二、〇〇〇	六				
石井長吉煙草製造場	同	同	同	二、〇〇〇	八				
梶山久次郎煙草製造場	同	同	同	二、五〇〇	三				
大庭房太郎煙草製造場	同	同	同	三、〇〇〇	五				
青木二三蔵煙草製造場	同	同	同	七、〇〇〇	三				
宇山直次郎煙草製造場	同	同	同	二、二〇〇	〇				
花井浦次郎煙草製造場	同	同	同	一〇、〇〇〇	三				
今井合名会社工場	同	同	同	三、四〇〇	〇				
富士紡績株式会社分工場	同	同	同	?	三				
清水製糸場	同	同	同	一、〇〇〇	〇				
比々多製糸場	同	同	同	四、〇〇〇	三				
和田機械製糸場	同	同	同	二、〇〇〇	三				
玉川製糸場	同	同	同	一、五〇〇	四				
富田製糸場	同	同	同	四、〇〇〇	三				
紅谷製糸場	同	同	同	八〇〇	三				
熊沢製糸場	同	同	同	一、二〇〇	三				
入内島製糸工場	同	同	同	一、五〇〇	三				
広瀬製糸工場	同	同	同	一、〇〇〇	三				
鈴木製糸工場	同	同	同	一、四〇〇	三				
蓼川製糸館	生糸	高座郡綾瀬村本蓼川 渋谷村福田	明治二十七年六月 二十六年四月 二十七年三月	二、〇〇〇	元				







キリンビールのポスター（1903）  
 『麒麟麦酒株式会社五十年史』より

石油株式会社横浜製油所が、一九〇九年八月には日清製粉株式会社横浜工場が神奈川埋立第二区に設立された。

他方、それまで広大な田畑と牧歌的な風景を残していた川崎町周辺へも、相ついで工場の進出が始まった。すなわち、一九〇五年十二月に京浜電気鉄道（現在 京浜急行）の品川―神奈川間が全通したのに続いて、一九〇六年九月には横浜の砂糖貿易商阿部・増田らによって横浜製糖株式会社（現在 明治製糖株式会社）が多摩川沿いの橘樹郡御幸村（現在 川崎市幸区）に設立され、また一九〇八年には御幸村に東京電気株式会社川崎製造所が、翌一九〇九年三月には川崎町久根崎に日本蓄音機製造株式会社（現在 日本コロムビア川崎工場）が相次いで進出した。また一九〇六一―一九〇七年には、中央の有力者桂次郎・守屋此助・浅野総一郎らによって子安村海岸の埋立てが計画され、また一九一二年には浅野総一郎・安田善次郎・渋沢栄一らを株主とした鶴見埋立組合が設立された。そして、一九一三年から一九二八年にかけて、多摩川河口から鶴見川河口にいたる、総面積五

一九〇〇年代 一九〇〇年代の工業化は、東京湾臨海部への大資本の新設工場 の進出によってさらに進展し、製造部門も多様化した。

すなわち、横浜周辺では東京に本社を置く富士瓦斯紡績株式会社が、一九〇三（明治三十六）年八月、保土ヶ谷に従業員二〇〇〇人の大工場を建設したのをはじめ、一九〇六年四月には、札幌麦酒・日本麦酒・大阪麦酒の三社合併によって成立した大日本麦酒株式会社（一八九六年八月設立）も、保土ヶ谷に工場を建設した。また一九〇七年二月には、外国人経営のビール会社を継承した麒麟<sup>きりん</sup>麦酒株式会社が、三菱の出資によって横浜に設立され、また同年十月には保土ヶ谷に宝田

〇〇鈔の大規模な埋立工事が進行することになったのである。

### 内陸工業の動向

このような臨海部の変化に照応して、内陸部でも、製糸業や煙草製造業を中心としたゆるやかな工業化が進行した。こうした内陸部の工場や作業所は、一八九〇（明治二十三）年前後にはその動力をほとんど水力にたよっていたが、『明治三十三年神奈川県統計書』では、煙草製造業を除いて大部分蒸気力への転換を終えていた。また、作業所や雇用労働者も一八九〇年代から一九〇〇年代にかけてかなり増加した。しかし、その規模は一作業所当たりせいぜい一〇―一五〇名程度で、一〇〇名前後の労働者を雇用した作業所は、盛進社（製糸場返し、鎌倉郡中和田村）、関東製糸場（足柄上郡吉田島村）、若尾製糸場（高座郡藤沢町鶴沼）、持田製糸場（高座郡渋谷村長後）など数例に過ぎなかった（『明治四十三年神奈川県統計書』）。こうした零細性は煙草製造業の場合さらにいちじるしく、『明治三十三年神奈川県統計書』によれば、一〇―二〇名の従業者を抱える作業所がほとんどであった。そして、一九〇四―一九〇五年には煙草専売法の施行（明治三十七年四月一日公布、同七月一日施行、刻み煙草は明治三十八年四月一日施行）によって、その営業権をすべて没収されることになったのである。

しかし、このような零細工業は、内陸部だけでなく横浜・川崎周辺にも広く存在した。いま『明治四十二年神奈川県統計書』によってその状況を見ると（表三―一四）、横浜周辺にはいずれも一〇―三〇名ほどの従業者を抱えた輸出用絹ハンカチ製造業や洋家具製造業、印刷・インク・石鹼・楽器などの小工場が、また、川崎周辺には洋式建築材料の煉瓦れんがやモスリン・毛布などの洋風織物、麻真田・ちり紙などを製造する小企業が存在した。こうした小企業はもともと市場的にも技術的にも大資本になじまないものであったが、他方また、わが国特有の過剰人口によって絶えず再生産され、その後いわゆる中小企業として、日本経済のなかに特有の座を占めることになったのである。

表三一四 県下工場一覽

工場名称	製品ノ種類	所在地及工場主	創立年月	原動機	職工数		
					男	女	計
合資会社メニール商会	輸出羽二重及綿布整理	横浜市山下町一六六商店 合資会社メニール商店	明治四〇年二月	汽機	一九	四	二三
秋元工場	清冷飲料水	同市蓬萊町四ノ四八 秋元巳之助	同 二〇、一	汽機	五	〇	二五
博多屋染色工場	絹布染色	同市若竹町一 山崎理一郎	同 四、四	汽機	二	一	二
真葛陶磁器製造所	花瓶類其他	同市南太田町一ノ六三一 宮川智之助	同 二、三		一	二	二
早川工場	ハンカチーフ	同市神奈川町 早川留吉	同 三、四		一	七	七
近栄製帽所	鉄葉真鍮 麦稈打帽 烏打帽子	同市不老町三二一七 大井伊三吉	同 二五、二		五	一	五
南中舎	活版印刷帳簿製本	同市根岸町八七三 合資会社近栄洋物店	同 一八、一		二	七	三
福音印刷合資会社	諸印刷物及諸製本	同市南仲通四ノ七七 藪覚次郎	同 一五、五	瓦斯発動機	五	六	二一
加藤工場	諸印刷物及諸製本	同市山下町八一 同市青木町一二〇 加藤八郎右衛門	同 三、九	電動機	一七	二	一九
文寿堂営業部	洋手帳・洋帳簿・諸印刷	同市常盤町四ノ五五 佐藤繁次郎	天保三、〇	電動機	一〇	一	一一
清水更紗工場	輸出絹物更紗染	同市南太田町一七二三 清水文次郎	明治三、三	電動機	六	七	一三
長谷川商店	同絹手巾更紗染	同市蓬萊町九ノ一一 長谷川ハル	同 三、四		一	一	二
板紙箱	同紙箱	同市蓬萊町九ノ一一 長谷川ハル	同 一六、三		三	一	四

〔明治四十二年神奈川県統計書〕

岩線電鍍工場	渡辺造船鉄工場	吉沢鉄工場	内田鑄造工場	石田工場	鍛冶亀	川上製鐵所	佐藤鉄工場	横浜船渠株式会社		森田工場	三平工場	硝子壘	更信工場	高木硝子工場
電気鍍金	船舶及諸機械修繕	石油瓦斯發動機	諸機械付属品	諸器械類	建築用金物	鉄葉罐	機械修繕	船用諸機械及船渠料	一切	生糸機械	陸上建築用金物	薬壘	形付更紗	薬品入壘
岩瀬栄吉	同市元町五ノ一八二	同市高島町一ノ一	同市松影町三ノ一九一	同市平沼町三ノ三四	同市三吉町一ノ五	同市青木町一ノ二八	同市扇町五ノ一五〇	同市入船町一	同市元町一ノ七六	同市寿町三ノ一三五	同市北方町四六三	同市神奈川町八一八	同市太田町二〇四八	同市神奈川町
同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同
同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同
電	同	同	石油發動機	瓦斯發動機	汽機	汽機	石油發動機	汽機・ベルト式水車・電動機	石油發動機	器			汽機	
八	七	八	六	九	六	二〇	六	六	八	六	四	三	四	六
											二			
八	七	八	六	九	六	二〇	六	六	八	六	六	三	四	六

工場名称	製品ノ種類	所在地及工場主	創立案月	原動機	職工数
横浜電線株式会社	各種電線及鉛管	横浜市裏高島町二ノ四 電線株式会社	明治元、七月	汽機	男 三二 女 一四 計 四五
鑄木工場	ホワイトシャツ類	同市南太田町二二〇二 鑄木石作	同 三、二	汽機	男 七 女 一 計 八
柵橋烟火所	花火	同市南太田町一八六一 柵橋通治	同 三、〇	汽機	男 四 女 三 計 七
岩井製油合資会社	水油・肥料	同市青木町三五五二 岩井製油合資会社	同 七、〇	汽機	男 一五 女 一 計 一六
中虎商店	手拭	同市蓬萊町二ノ一一 中虎商店	同 四、二	汽機	男 一〇 女 一 計 一一
出口整理工場	絹布其他精練染色仕上	同市高島町四ノ九 出口直吉	同 元、二	汽機	男 二六 女 二 計 二八
宮崎染色工場	羽二重染色	同市初音町四ノ三三 宮崎竹次郎	同 三、四	汽機	男 一九 女 一 計 二〇
塩崎染色工場	羽二重製理及染色	同市末吉町一ノ六 塩崎留蔵	同 三、〇	汽機	男 二 女 一 計 三
	輸出木箱	同市万代町三ノ四八 月村松五郎	同 二、〇	汽機	男 六 女 一 計 七
	絹糸及木綿糸	同蓬萊町 内山要助	同 三、四	石油発動機	男 四 女 三 計 七
高島リンネル工場	リンネル・パテン整理業	同市長者町八ノ八五 高橋常良	同 四、二	汽機	男 五 女 二 計 七
大和屋商店工場	シャツ類	同市弁天通一ノ六 石川清右衛門	同 九、六	電動機	男 五 女 一 計 六
硝子工場	ランプノホヤ	同市橋町一ノ二 福田金次郎	同 三、〇	汽機	男 六 女 一 計 七

深沢工場	稲田商店	大橋活版印刷所	増田製糖所	安部製糖所	港栄社印刷所	ジャパンメー ル	岡本造船所	大川印刷所	
洋輸出小箱服	西洋婦人服下着類	印	砂糖・其他	精糖・黒砂糖・糖蜜	諸印刷	新聞紙	新端紙	石版活版印刷物製本	絹手巾
同市住吉町四 遠藤三之助	同市山吹町一ノ一 深沢梅吉	同市千代崎町三 稲田金太郎	同市中村町 羽生秀之助	同市相生町三ノ五一 大橋徳寿	同市同町 橋本重助	同市北町一八七 岡本 吉	同市山下町六〇 同市山ノ下町五五 エフプリンクリ	同市源次郎 大川源次郎	同市西戸部町 田中一八
同 三、二	同 二、五	同 二、〇	同 三、一	同 二、〇	同 二、二	同 二、一	同 二、二	同 二、二	同 四、〇
				汽	汽	電	石油発動機	石油発動機	電動機其他
				機	機	機			
六	五	六	六	〇	一	三	九	六	一
				九	二	一			二
六	五	三	六	〇	九	七	九	六	〇

工場名称		製品ノ種類	所在地及工場主	創立年月	原動機	職工数	
						男	女
						計	
横浜 機 鐘 工 場	機 械 修 繕	横 濱 市 山 下 町 一 六 一 ゼ ヨ コ ハ マ エ ン ジ ン エ ン ド ア イ オ ン ウ オ ー ク ス	明治 三、〇 年 月	汽 機・ 発 電 機	三〇	一	三〇
井 上 工 場	輪 出 刺 繡	同 市 西 戸 部 町 六 四 四	同 三、 一	汽 機	二	三	五
間 瀬 印 刷 所	活 版 印 刷	同 市 福 富 町 二 ノ 六 七	同 三、 〇	汽 機	三	一	四
高 松 工 場	椅 子 卓 子 及 合 棚 類	同 市 羽 衣 町 一 ノ 一 〇	同 二、 〇	汽 機	二	一	三
小 林 倉 庫	絹 手 巾	同 市 扇 町 四 ノ 一 四 二	同 一、 五、 五	汽 機	一	六	七
横 浜 耐 火 煉 瓦 製 造 所	耐 火 煉 瓦	同 市 根 岸 町	同 四、 二	同	六	一	七
海 老 塚 防 水 布 工 場	綾 毛 綿 防 水 布	同 市 西 戸 部 町	同 三、 八	同	三	一	四
中 村 印 刷 所	印 刷 物 一 式	同 市 太 田 町 三 ノ 五 五	同 三、 一	瓦 斯 発 動 機	一	一	二
笠 原 商 店 工 場	パ ド テ ン リ ン ブ ル ク ン	同 市 南 吉 田 町	同 六、 三	同	一	一	二
横 濱 實 業 新 報 社 印 刷 工 場	新 聞 紙	同 市 本 町 六 ノ 八 六 社 長 富 田 源 太 郎	同 二、 〇	瓦 斯 発 動 機	九	一	一〇
太 田 醬 油 釀 造 合 資 會 社	醬 油	同 市 神 奈 川 町 八 八 吉 川 榮 次 郎 同 市 南 太 田 町 九 一 二 太 田 醬 油 合 資 會 社	同 三、 五	汽 機	三	一	四

家 母 具 下 木 製 彫 造 西 所 洋	横 浜 製 氷 所	金 子 石 鹼 工 場	株 式 レ ン ク ロ フ ォ ー ド 社	リ ン ネ ル 洗 濯 工 場				リ ネ ン 整 理 工 場			田 辺 工 場		
西 洋 洗 濯	椅 子 類	飲 料 用 氷	洗 濯 石 鹼	食 パ ン 其 他	リ ン ネ ル 洗 濯 整 理	同	同	絹 手 巾	整 理	リ ネ ン 手 巾	同	同	絹 手 巾
同市北方町五三二 米谷長松	同市山手町一八四 同市南太田町一七三九 母下秀之輔 エル、ストンブリック	同市南太田町一七三九 金子幸助	同市山下町五九 レックロフォード株式会社	同市南吉田町八八五 戸村登	同市福富町三ノ一〇六 児玉忠五郎	同市戸部町三ノ七九 水野乙松	同市伊勢町三ノ六八 鈴木末吉	同市山下町二六二 古河吉次郎	同市南吉田町八八五 宮田春吉	同市西戸部町六三 高橋梅吉	同市松影町三ノ一〇八 田辺辰五郎	同市神奈川町二〇六 西川総吉	同市神奈川町二六五 本間浅次郎
同 四、 四	同 一、 六 ?	同 三、 九	同 三、 〇	同 四、 五	同 二、 四	同 三、 四 (マ)	同 三、 四	同 四、 四	同 三、 九	同 三、 九	同 三、 四	同 三、 四	同 三、 四
六	〇	〇	五	九	五	一			二		一		二
一	八			二	〇	五	八	八	六	セ	セ	〇	五
セ	六	〇	五	二	五	六	八	八	〇	セ	八	〇	三



工場名称	製品ノ種類	所在地及工場主	創立年月	原動機	職工数	
					男	女
根津製鉛横浜分工場	鉛出縮	横浜市南吉田町七七〇 丸山 義治	明治 六年二月	ミシン	七	七
横浜写真版印刷所	絵ハガキ	同市南太田町一五六五 本間菊次郎	同 七年	電機	七	七
角野商店	板紙箱文庫紙	同市翁町三ノ一三一 上田 義三	同 三年〇	電機	九	九
横浜硝子製造株式会社	麦酒瓶其他	同市不老町二 角野市之助	同 三年四	電機	六	六
小嶋ボール箱羽二重包紙製所	ボール箱羽二重包紙	同市根岸町八七五 取締役 松村 清吉	同 三年五	熔解室	一八	三
片山製蜜所	糖蜜	同市万代町一ノ一六 小島幸次郎	同 三年〇	蒸汽附属水送	七	二
伊豆庄染色工場	羽二重染色	同市高島町三ノ五 片山 金治	同 三年五	蒸汽	六	六
合資会社大日本銘石商会	建築用色	同市長者町五ノ五三 青木 喜六	同 三年三	汽機	九	九
帝国冷蔵株式会社	飲用他	同市中村町七四二 代表者 福嶋保三郎	同 三年〇	電機	六	三
横浜魚油株式会社	魚油・椰子油・其他	同市宮川町二ノ三 帝国冷蔵株式会社	同 三年八	同	五	五
土屋	魚油・椰子油・其他	同市青木町一ノ一 横浜魚油株式会社	同 三年二	汽機・電動機	九	三
西川オルガン及ピアノ所	オルガン・ピアノ	同市元町四ノ一六六 中村 正美	同 七年〇	汽機	六	一
西川オルガン及ピアノ所	オルガン・ピアノ	同市日ノ出町二ノ三〇 西川 虎吉	同 六年〇	瓦斯發動機	六	三
					計	二〇四

横濱肥料製造株式会社	新鉄工所	加藤工場	吉川工場	製函工場	今硝子工場	清水屋	横濱電気株式会社		榊原製綿工場	竹内造船所	続印刷工場	絹手巾製造所	戸部製綿工場
完全肥料過磷酸石灰	並陸船諸汽缶機械	絹ハンケチ	委託羽二重更紗捺染	茶箱	玻璃壘	洗濯品	電気	ジガヤケウツトン	打綿	造船	団扇用印画エハガキ	手巾	棉花
同市西平沼町一二二 専務取締役 田原 当一	同市真砂町二ノ二七 新礼助	同市同町 加蔵やゑ	同市西戸部町六一七 吉川 善蔵	同市扇町三ノ一二九 岡本金二郎	同市神奈川町 塩瀬国次郎	同市元町一ノ五九 岡沢辰次郎	同市長取締役 木村利右衛門 同市常盤町 代表者	同市福富町一ノ四 草柳重次郎	同市宮川町三ノ四三 柳原 常吉	同市青木町三六一七 竹内佐五平	同市 普	同市扇町三ノ一 宮川長太郎	同市南吉田町五三八 戸部徳太郎
同 元、二	同 一五、〇	同 一五、九	同 一六、三	同 一三、五	明治 三、二	元治 一、二	同 一三、〇	同 一三、五	同 一三、〇	同 一六、三	同 一五、〇	同 一六、〇	同 一四、〇
汽機	瓦斯発動機	ミシ				汽機・汽機タービン式水車 トポン式水車 機発電機 水火力	電機	ミシ	電機			ミシ	瓦斯発動機
三	三	三	六	五	六	四	三	〇	八	六	五		六
三		三				一			二			八	
三	三 (ママ)	六	九	五	六	五	三	〇	三	六	五	八	六

工場名称	製品ノ種類	所在地及工場主	創立年月	原動機	職工数
麒麟麦酒株式会社	麦酒	横浜市山手町一三三 専務取締役 米井源治郎	明治 四、二 年 月	汽機 自発電機	男 一八四 女 一〇一 計 二八五
梅原造船鉄工所	船舶修繕	同市高島町七ノ一五 梅原竹次郎	同 六、五	蒸気タービン	男 三〇 女 一 計 三一
横浜活版舎	印刷物	同市住吉町五七二 山崎ぬひ	同 四、〇	電動機	男 二五 女 四 計 二九
金港舎	同	同市尾上町四ノ六五 松本 真吉	同 二、二	同	男 二九 女 三 計 三二
西洋家具	同	同市元町三ノ一二八 宝田信太郎	同 三、〇	同	男 六 女 一 計 七
建築金物一式	同	同市石川仲町四ノ六九 鈴木 亀吉	同 一〇、〇	同	男 六 女 一 計 七
漆器木地製造所	漆器塗下木地箱	同市末吉町三ノ四一 花川保太郎	同 四、六	電動機	男 六 女 一 計 七
横浜毎朝新報社	新聞紙	同市南仲通四ノ七三 牧内元太郎	同 二、九	電動機	男 二〇 女 一 計 二一
諸器械ノ修繕	同	同市南吉田町 齋藤市太郎	同 二、〇	石油発動機	男 二 女 一 計 三
マルエス石鹼製造所	洗濯石鹼	同市南太田町 平度平三郎	同 二、三	同	男 二〇 女 六 計 二六
笠原商店ボール函製造所	ボール函	同市松影町 笠原庄太郎	同 六、二	同	男 八 女 一 計 九
絹リンネル手巾絹手巾	同	同市吉岡町三ノ三〇 広島健次郎	同 四、二	同	男 七 女 一 計 八
絹手巾	同	同市戸部町二ノ九九 峯野 春蔵	同 三、九	同	男 一 女 一 計 二

